

News Letter

演劇・映像の国際的教育研究拠点



- 特集記事 1
西洋演劇研究コース：
「エーリカ・フィッシャー＝
リヒテ教授連続講演会」
- 特集記事 2
日本演劇研究コース：
公開講座「浄瑠璃」
稀曲演奏 義太夫
「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」
- 特集記事 3
日本演劇・東洋演劇研究コース：
2009年度第1回グローバルCOE
博士論文成果報告会

- 活動報告
● 西洋演劇研究コース P3
● 日本演劇研究コース P4
● 舞踊研究コース P4
● 東洋演劇研究コース P5
● 映像研究コース P6
● 芸術文化環境研究コース P7
- 新刊紹介 P6～7
- イベントカレンダー P8
編集後記

特集記事 ① 報告

西洋演劇研究コース： 「エーリカ・フィッシャー＝リヒテ教授連続講演会」

2009年9月29日(火) 16:30～18:30・30日(水) 18:30～20:30 大隈小講堂・小野記念講堂

西洋演劇研究コースでは、今秋、ドイツにおける演劇学の指導的な研究者であるエーリカ・フィッシャー＝リヒテ教授 (Prof. Dr. Erika Fischer-Lichte ベルリン自由大学) を招聘し、従来の演劇論とは一線を画す、本格的なパフォーマンス論についての連続講演会を開催した。

講演会の初日は、演劇博物館副館長・秋葉裕一 (理工学術院教授) の挨拶に始まった。フィッシャー＝リヒテ教授は、近著『パフォーマンスの美学』が、今年、日本でも刊行されたことに鑑み、そのエッセンスに当たる部分を、具体的な映像資料を交え明快に語った。同書の翻訳者の一人である平田栄一朗氏 (慶応大学文学部准教授) が、司会・通訳を務め、同書の背景についても次のように解説した。

演劇研究者としてフィッシャー＝リヒテ教授の業績は、ドイツ語圏を超えて世界的に知られている。近年では、2004年に刊行された『パフォーマンスの美学』(Ästhetik des Performativen.) が研究者に注目され、早くも2008年には英訳 (The Transformative Power of Performance. A New Aesthetics.) が出版されている。ドイツ語圏では元来、演劇芸術も詩文学の伝統に結びついて広範な支持を得てきたのであり、したがって、演劇研究においても1960年代から英語圏で発展したパフォーマンス理論がすぐにその

まま導入されたわけではない。その中でフィッシャー＝リヒテ教授による『パフォーマンスの美学』は、演劇を何よりも上演において考察すべき芸術ジャンルと捉え、それまでのパフォーマンス論を吸収したことによって、包括的で徹底したパフォーマンス基礎理論を構築したとの評価を得ている。

連続講演会の第二日目は、「ギリシャ悲劇、ドイツの上演と日本の上演—伝統、機能、意義—」と題し、日本とドイツで上演されたギリシャ悲劇について、フィッシャー＝リヒテ教授にお話いただいた。司会は、事業推進担当者・丸本隆 (法学学術院教授) が務め、平田氏と同じく翻訳に携わった萩原健氏 (明治大学講師) の通訳によって進められた。フィッシャー＝リヒテ教授は、1970年代から、日独の両方においてギリシャ悲劇の受容が興味深い形で行われたことを指摘し、鈴木忠志演出の『トロイアの女』(1974)、蜷川幸雄演出の『オイディプス王』(1976)などを参照した。初日に引き続き多数の来場者に恵まれたこともあり、講演の後には活発な議論が交わされた。

(研究助手 村瀬民子)



特集記事 ② 日本演劇研究コース：公開講座「浄瑠璃」

稀曲奏演 義太夫「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」

2009年10月1日(木) 14:00～16:00 大隈小講堂 浄瑠璃 豊竹英大夫、三味線 鶴澤清友、解説 内山美樹子

「和田合戦女舞鶴」は元文元年(1736)大坂・豊竹座で初演された全五段の時代物。三段目切「市若初陣の段」は、戦前までは人口に膾炙した曲であったが、1945年以後は稀曲となっている。ただ十世豊竹若大夫が昭和25年(1950)に襲名披露曲として語り、最晩年昭和40年(1965)にも名演を聴かせている(東京・大阪)ので、若大夫を知る世代には忘れ難い曲である。大阪の文楽公演ではこの1965年若大夫所演以後、上演されていない。東京の文楽公演では一度取り上げられたが、強い手応えを残すことなく、以後二十年間上演されていない。

日本演劇研究コース・人形浄瑠璃文楽の研究会は、初代豊竹若大夫(越前少掾)初演、東風の代表曲「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」の現代的魅りを期して、十世若大夫の孫である豊竹英大夫師に取り組みをお願いし、三味線は鶴澤清友師に御引き受けいただいた。

2009年10月1日公開講座「浄瑠璃」の日程が確定する以前から、英大夫師と浄瑠璃研究会は二回の講演会(2008年3月24日・2009年2月24日)、その他の機会を通じて、「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」の戯曲内容を読み抜いた。公開講座「浄瑠璃」のチラシに「見えない政争の渦に巻き込まれ、残酷な選択を迫られる板額の悲劇」とある「残酷な選択」とはどういうことか、板額が市若に自ら切腹させるように仕向けるのはなぜか。作品を読み直していく中で、英大夫師は、板額の行為は「市若の顔を立てるとのことだ」と喝破した。

親が子供をだまして自害させ身替りに立てる、残酷でいや



な芝居、といったこの作品への否定的評価(かなり一般化している)は、2009年10月1日英大夫・清友両師による「市若初陣」の感動的な舞台の前に、根拠を失った。「こんな素晴らしい作品を語れて仕合せだ」「市若はかわいそう、ではない。この少年なりに、いい人生を生きただ」(奏演後の英大夫師談)。二十年以前の演者にはなかった作品との出会いを、英大夫・清友両師は、そして聴衆は、体験することができたのである。

英大夫・清友「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」は10月10日午前11時、NHKラジオFMで放送される。放送時間の関係で十数分のカットを余儀なくされたのは残念だが、ともかく全国に放送され、この曲が再認識される契機となり得るのは幸いである。

因みに1981年以来、回を重ねた公開講座「浄瑠璃」で、筆者が現役教員として解説するのは、今回が最後となる(公開講座「浄瑠璃」については、詳しくは『演劇映像学2009』第3集など参照)。(事業推進担当者 内山美樹子)

特集記事 ③

2009年度 第1回 グローバルCOE博士論文成果報告会

2009年7月23日(木) 13:00～17:00 大隈記念タワー(26号館)地下多目的講義室

2009年度第1回目となる博士論文成果報告会では、金 牡蘭氏(GCOE研究員)、神田裕子氏(GCOE研究協力者)、そして魏 名婕氏(GCOE研究員)の3名の発表が行われた。神田裕子氏の発表では、当時の資料に基づいた極めて緻密な分析が示され、会場からの活発な質疑応答が繰り広げられた。そして金 牡蘭氏と魏 名婕氏の研究テーマは、朝鮮におけるアイルランド劇、中国近代劇の成立とそれぞれ自国の演劇を題材にしているが、近代の日本演劇と深く関わりを持つため異なる分野の研究者にとっても印象深い発表となった。

司会：長嶋由紀子(GCOE研究助手)

- ① 13:00～14:10 金 牡蘭(GCOE研究員、筑波大学博士(文学)2008年度提出)
「われわれ」のアイルランド—日本と植民地朝鮮におけるアイルランド文学の〈移動〉」
- ② 14:20～15:30 神田裕子(GCOE研究協力者、早稲田大学博士(文学)2008年度提出)
「能と注釈書—その古典世界をめぐる—」
- ③ 15:40～16:50 魏 名婕(GCOE研究員、金沢大学博士(文学)2007年度提出)
「中国近代劇成立期における日本新劇運動の受容—春柳社を中心に—」

西洋演劇研究コース:

活動報告

■ エーリカ・フィッシャー = リヒテ教授連続講演会 (西洋全体企画)

演劇学の第一人者であるエーリカ・フィッシャー = リヒテ氏 (Prof. Dr. Erika Fischer-Lichte ベルリン自由大学教授) をお招きし、連続講演会を行った。(特集記事参照)

日時: 2009年9月29日(火) 16:30~18:30

演題: 『パフォーマンスの美学』について

場所: 大隈小講堂

司会・通訳: 平田栄一郎氏 (慶応大学文学部准教授)

日時: 2009年9月30日(水) 18:30~20:30

演題: ギリシャ悲劇、ドイツの上演と日本の上演—伝統機能意義—

場所: 小野記念講堂

司会: 丸本隆 (事業推進担当者・法文学術院教授)

通訳: 萩原健氏 (明治大学講師)

■ ブレヒト連続セミナー (秋葉裕一)

先年度からの継続企画として、ベルトルト・ブレヒトの研究者ヨアヒム・ルケーゼ氏 (Dr. Joachim Lucchesi カールスルーエ大学文学部附属研究所) をお招きし、連続セミナーを行った。

日時: 2009年10月13日(火) 16:30~18:30

演題: 『乞食オペラ』から『三文オペラ』へ

場所: 国際会議場共同研究室1

日時: 2009年10月14日(水) 16:30~18:30

演題: ハンス・アイスラーの「映画音楽プロジェクト」

場所: 国際会議場共同研究室7

日時: 2009年10月17日(土) 16:30~18:30

演題: ハンス・アイスラーの「ハリウッド歌謡集」

場所: 国際会議場共同研究室7

■ 身体表象論プログラム (坂内太)

GCOE 研究員による研究発表と、その報告に関するディスカッションを行った。

第1回研究会 2009年7月3日(金)

報告者: 菊地浩平 (GCOE 研究員)

タイトル: Segel, Harold. *Pinocchio's Progeny*: モダニズム及びアヴァンギャルド演劇に於ける人形・自動人形の表象

■ ポストコロナル演劇研究会 (澤田敬司)

「アイヌ・北米先住民ダンスワークショップ&レクチャー」

日時: 2009年10月7日(水) 18:00~21:00

場所: 国際会議場第1会議室

酒井美直氏 (アイヌ文化振興・研究推進機構アイヌ文化アドバイザー)、デイスター/ロザリー・ジョーンズ氏 (トレント大学) を招き、日本と北米、二つの地域の先住民舞踊を体験する形式のワークショップとレクチャーを行った。現代において芸術と民族の伝統がどのような融合をみせているかについて、理解を深めることを目的として開催した。

■ シェイクスピア・ゼミ (冬木ひろみ・本山哲人)

第1回講演会 2009年7月12日(日) 15:30~17:00

第2回講演会 2009年7月18日(土) 15:30~17:30

第3回講演会 2009年10月17日(土) 15:30~17:00

第1回講演会では、佐々木和貴氏 (秋田大学教授) にお越しいただき、ネイハム・テイトによる、シェイクスピア『リア王』の翻案 (1680) についてお話しいただいた。第2回は、ケンジ・ヨシノ氏 (ニューヨーク大学法科大学院教授) を招聘し、法律研究者の角度から、『ヴェニスの商人』についてお話しいただいた。第3回は、河合祥一郎氏 (東京大学准教授) による「シェイクスピアの言葉」と題した講演会であった。会場はいずれも26号館 (大隈タワー) 3階302教室。

■ 「オペラ/音楽劇の総合的研究」プロジェクト (通称: オペラ研究会) (丸本隆)

オペラ研究会では夏期休暇期間も含め以下の月例会を行った。

日時: 2009年8月4日 15:00~17:00

場所: 8号館219号室

発表者: 白井史人 (GCOE 研究員)

題目: オペラ《モーゼとアロン》の映像化を巡って:
ストローブ=ユイレからシェーンベルクへ

日時: 2009年10月6日(火) 18:15~20:30

場所: 14号館804号室

発表者: 袴田麻祐子 (昭和音楽大学舞台芸術センター嘱託研究員、GCOE 研究員)

題目: 大正末~昭和初期の異文化受容をめぐる諸相
オペラ・浅草・高木徳子

■ アイルランド演劇研究会 (三神弘子)

第2回 2009年7月4日(土) 15:00~18:00

11号館1453共同研究室

第3回 2009年10月3日(土) 15:00~18:00

11号館1453共同研究室

第4回 2009年10月17日(土) 15:00~18:00

6号館318教室

第2回では、事業推進担当者である三神が、Easter Rising (1916) をテーマにした演劇作品についての研究報告を行った。第3回において、磯部哲也氏 (研究協力者・愛知工業大学教授) をスピーカーに招き、「アイルランドにおける映画の撮影」をテーマに扱った演劇の分析を通して、演劇と映画というジャンルの交錯について、考察した。第4回では、来日中のリナ・オドワイヤー氏 (アイルランド国立大学ゴールウェイ校) を講師に招き、講演会を開催した。オドワイヤー氏には、トム・マーフィーについてお話しいただき、現代アイルランド演劇にとって、マーフィーがどのような貢献をしてきたか、を検討した。

■ 17世紀フランス演劇研究会 (オディール・デュスッド)

月一回の勉強会の他に以下の研究発表会を開催した。

日時: 2009年7月24日(金) 16:00~18:00

場所: 国際会議場共同研究室7

発表者: 白石嘉治 (GCOE 研究協力者)

題目: subulime と coloris —— 美学的地平の発生について
(研究助手 鈴木辰一 (2009年9月15日まで)・村瀬民子)

日本演劇研究コース：

活動報告

■「荒事—歌舞伎の様式と発想を考える会」第1回報告

日時：2009年7月18日(土) 14:30~17:00
7月19日(日) 13:00~17:00

場所：戸山キャンパス33-2号館演劇映像第2専修室

この研究会は、「郡司正勝の研究方法といわれる歌舞伎の芸能論のなかでも、その中心に位置する荒事を取り上げ、従来の研究史を整理しつつ、新たな荒事研究の可能性について、様式と発想の両面から再検討する」とうたっていますが、具体的にまとまった研究業績を生み出そうと頑張るわけではなく、郡司先生の教えを受けた者が、改めて先生の研究方法を見つめ直し、我が身を省みて、次なる一步への糧にしようという思いでスタートさせたものです。

第1回は2009年7月18・19日に戸山キャンパス演劇映像専修室2で行われ、和田が基調報告的に日頃の関心を話し、講師の武井協三氏(国文学研究資料館教授)・佐藤恵里氏(高知女子大学教授)がそれにコメントをしたり、各自の最近の研究成果を報告したりして、なかなか興味深い議論をすることができたと思っています。再三ご出座をご遠慮下さるように懇願したにも関わらず、初日にご臨席たまわった内山美樹子先生からも、時にトンチンカンな質問が出て、同門ならではなごやかで楽しい勉強会でした。

どうも最近では成果万能主義で、楽しい研究が忘れられてしまっているような気がしてなりません。早稲田的な研究の面白さの伝統を、少しでも大学院生諸君にも伝えられたら、この研究会の目的は半ば達せられるのではないかと考えています。もちろん、それなりの成果論文を出せるように努力はしますが、
(事業推進担当者 和田修)

■チェスキークルムロフ出張報告

日本演劇研究コースでは、演劇舞台構造の国際比較研究の一環として、2009年8月24日~28日にチェスキークルムロフ城に滞在し、同城城主であったシュワルツェンベルク家歴代当主の図書館蔵書を調査・撮影した。本調査

は、2007年度末に行われた下調査の結果を踏まえて計画されたものである。参加者は、千川哲生GCOE研究員、アイケ・グロスマン フランクフルト大学専任講師(研究協力者)、ペトル・ホリー東京チェコセンター所長(研究協力者)、竹本幹夫演劇博物館長(拠点リーダー)の4名で、パヴェル・スラフコ チェスキークルムロフ城博物館館長のご厚意により、1499年にストラズブルクで刊行されたドイツ語版“*Terentius der bochgelert vn*”を始めとして、18世紀までに刊行された、イタリア語・フランス語・ラテン語などのバロック劇・オペラ台本や書き割り帳、パンフレット類を中心に撮影した。またさらにスラフコ館長が自ら収集された研究資料や、同じくスラフコ館長作成の演劇小道具類アニメーションなどの図版類の提供も受けた。今回は領主の蔵書で作品類が中心となったが、次回以降は、シェヴォイ市資料館に所蔵される由の、チェスキークルムロフ城の演劇そのものに関連する歴史文書類に調査の範囲を広げたい。

今回収集した資料類はデジタルファイルで総計25ギガバイトを越える膨大なもので、演劇博物館で副本として保存し、活用することが許されている。ただし写真掲載等はチェスキークルムロフ城博物館の許諾を利用者が申請することとなっている。(拠点リーダー・演劇博物館館長 竹本幹夫)



舞踊研究コース：

活動報告

■講演「バレエ・リュス100周年記念関連シンポジウム 他の海外最新情報」

2009年7月16日(木) (10:00~12:00)

早稲田大学国際会議場共同研究室1

講師 鈴木晶(法政大学教授・GCOE研究協力者)

約4ヶ月にわたるニューヨーク滞在の間に行われた「バレエ・リュス100周年」関連催事の研究調査及び、海外の舞踊学の最新動向について以下のように鈴木晶氏の講演が行われた。

- ①「バレエ・リュス100周年」を記念して開催された国際シンポジウム



「The Spirit of Diaghilev」

(アメリカ・ボストン、5月19日~21日)の内容報告を行った。

- ② ジョン・ノイマイヤー・コレクション所蔵のニジンスキーのデッサンを中心とした展覧会

「Tanz der Farben: Nijinskys Auge und die Abstraktion」を視察した時の所感が述べられた。この展覧会はニジンスキーのデッサンが、同時代のエクステール、ドロネーらの作品と一緒に展示された初めての催しであり、この展示は、彼のデッサンを芸術作品と捉え、且つ前衛的抽象絵画の時代の一翼を担っていたことを示すものである。それゆえこの展覧会は、ニジンスキー研究にとって画期的な意味を持つものである。

- ③ ハンブルク・バレエ・スクール(ノイマイヤー)とスクール・オブ・アメリカン・バレエ(バランシン)の見学及びインタビュー

東洋演劇研究コース：

東洋演劇研究コースでは、2009年7月に中国を代表する演劇研究機関である南京大学戲劇影視研究所から2名の講師を招聘して開催した2009年度前期定例研究会、及び2009年度第3回と第4回の共同ゼミについて、それぞれ報告する。

■ 2009年度前期定例研究会

日時：2009年7月25日(土) 14:00～17:20
会場：早稲田キャンパス26号館302室

講師：胡星亮(南京大学戲劇影視研究所教授)
「中国におけるスタニスラフスキー・システム」

東洋演劇研究コース近現代部門では今年1月より、中国におけるスタニスラフスキー・システムの受容に関する研究会を定期的に開催している。発表では、中華民国期から



1980年代までの各時期における同システムの受容状況に関し、理論と実演の側面からそれぞれ体系的に紹介され、出席者の問題関心を大いに刺激した。

講師：董健(南京大学戲劇影視研究所教授)
「中国現代演劇の文化的特徴：1949-2000」

講師は1980年代より、中国を代表する演劇研究機関である南京大学戲劇影視研究所を率いて多数の演劇研究者を養成して来られた、中国話劇研究の第一人者である。発表では、とりわけ文化大革命期の現代革命京劇(样板戲)に多く言及、その研究の意義を強調されて中国における研究状況を直截且つ大胆に語り、今後の現代革命京劇研究に

おいて、海外の中国演劇研究者との活発な共同研究を提唱された。



■ 共同ゼミ(会場は何れも早稲田キャンパス6号館318室)

第3回(2009年10月3日(土) 16:50～17:50)

発表者：橋千早(GCOE研究員)

「講経文の上演に関する一考察—P.2418《仏説父母恩重経講経文》の分析を中心に」

第4回(2009年11月14日(土) 14:00～18:00)

発表者：大江千晶(GCOE研究員・一橋大院)

「1920年代東北劇壇における文明戯公演の実態と影響—1925年歐陽予倩の大連・奉天公演を例に」

陳凌虹(GCOE研究員・総合研究大学院大院)

「『女形』と『男旦』—新派と文明戯を中心に」

李宛儒(GCOE研究員・名古屋大院)

「日本統治時期台湾における新式演劇の興起と発展—知識人の新劇活動と作品を中心に」

鈴木直子(演劇博物館助手・GCOE研究員)

「五四時期の北方の学生演劇」

波多野眞矢(GCOE研究員・中央大院)

「20世紀初頭の北京における日本人劇通について」

東洋演劇研究コースではコース所属の研究員に、博士論文の構想と進捗状況、並びに最新の研究成果を発表してもらう共同ゼミを開催している。第3回は古典部門の、第4回は近現代部門の研究員がそれぞれ発表を行った。第4回は今年12月、中国広州にて開催される国際シンポジウムのプレ発表を兼ねるものであった。(研究助手 森平崇文)

から得たそれぞれのシステムの特徴や比較が述べられた。

■ 博士論文及び紀要論文経過発表

2009年7月16日(木) (13:00～17:30)
早稲田大学国際会議場共同研究室1

舞踊研究コースでは、毎年GCOE研究員が取り組んでいる各人の研究課題及び経過についての発表が行われている。

今年度は、片岡康子(事業推進担当者)・吉川周平(GCOE研究協力者)・石井達朗(GCOE客員講師)・鈴木晶(GCOE研究協力者)諸先生の指導のもと、以下の



6名の研究員の発表があった。

小林奈央子

「ワシリー・カンディンスキーの〈舞台コンポジション〉における身体性と運動」

平野恵美子

「19C末から20C初頭のロシア文化研究」

北原まり子

「舞踊作品『春の祭典』における供犠の表象」

稲田奈緒美

「土方巽・暗黒舞踏研究～制度への叛乱」

竹田 恵子

「ダムタイプ作品『S/N』(1944)という公共的空間」

許 絹姫

「晋州券番に伝承された妓生舞踊の伝承様相」

(研究助手 崔柄珠)

映像研究コース：

初期の映画に関する研究を重点的に行っている映像研究コース（映画史）では、本年より1910年代の映画に関する研究プロジェクトを設けた。それはいわゆるearly cinemaと呼ばれるプリミティブな時代の映画とは分けへだてられる、映画が芸術的な意図のもとに製作され始められる時代に関する研究である。このプロジェクトの一環として、2009年6月から7月初めにかけて行われたポーニャの復元映画祭(il cinema ritrovato)に我々は参加した。ポーニャ市が運営するシネマテークは、内部に現像施設をもつなど、自前で映画の復元作業を行うのみならず、ポーニャ大学の演劇映画学部と提携して、その施設は大学の研究施設としても使われている。以前から我々とも付き合いをもち、資料の閲覧、映像の借用といった面で便宜を図っていただいていたが、グローバルCOEの研究プログラムとして本年はこの復元映画祭の1セッションである<100年前の映画>(cento anni fa)と提携し、上映並びに研究会をもたせていただいた。これは全体で12プログラムからなり、6月27日から7月4日までの全日を通して上映とレクチャーが行われた。我々が実際に関与したのは、そのうちの第7プログラムである。100年前の映画ということで、1909年の映画に関するワークショップであるが、この第7プログラムではこのセッションの責任者マリアン・レヴィンスキーとGCOE事業推進担当者である小松弘の発案により、1909年の世界各地の映画館における上映プログラムの再現ということが企てられた。

演劇博物館の所有になる「朝顔日記」、フィルムセンターの所蔵するイタリア映画「オセロ」等が、小松による解説と共に上映された。1909年の映画館の上映プログラムを再現するというこの試みは、とりわけ日本における上映プログラムの再現を行ったことによって、その特異性を認識せしめることができたとあってよいだろう。日本では日本国内で製作される歌舞伎映画や新派映画が、フランスやイタリアの映画と同一のプログラムで上映されていたわけであり、観客

はその表象上の差異を感じるか感じないかは別にせよ、とにかく同一プログラムという、同一の面上でそれらを受容していたことは間違いないのだ。これは世界においてはきわめてユニークな上映形態であったのだらうと想像される。例えば同時期に、中国で京劇映画のようなものが日常的に作られ、それらがフランスやイタリア映画と同一プログラムの中で上映され、しかも中国人によってそうしたプログラムが受容されていたならば、日本のこうした上映形態もそれほどユニークではないだろう。しかし歴史が語るように、中国では1909年にはそうした映画は作られなかったし、中国人自体が大して映画というものに関心を示さなかった（この時期中国において映画を見ていたのは、主として中国に住む欧米人たちであった）。他のアジア諸国でも程度の差こそあれ、ほぼ同じことが言える。してみると、日本の映画文化の状況は欧米と大差なく、それはアジアではほとんど例外的な文化状況であったことが分かる（まもなくパテ・フレールはインドは別にして、アジアで唯一の支社をシンガポールに置くことになるが、パテの支社が置かれるシンガポールですら国内での映画製作は皆無であった！）。

我々の今回の試みは、日本映画史に対する、ヨーロッパの研究者たちの新たな関心を引き起こすことができたと感じた。100年前、すなわち1909年に日本では明らかに、欧米とほぼ等しい映画文化が存在した。そしてそれはアジア諸国では例外的なことであった。

映像研究コース（映画史）では引き続き、1910年代に関するプロジェクトを海外の研究者、研究機関との連携において行う予定である。11月9日、10日に予定されている国際研究集會もこれの一環である。またポーニャでは来年度に関しても、同様の企画を1910年に関して行おうと話し合い、すでに企画作りが進行中である。

（事業推進担当者 小松弘）

新 刊 紹 介

『風姿花伝・三道 現代語訳付き』

（竹本幹夫訳注 角川ソフィア文庫 2009年9月発行）

本書は能の大成者である世阿弥の能楽論から、演者としてのあるべき姿を説いた『風姿花伝』と息子元能に能作を指南するために著された『三道』の二作品を、脚注及び現代語訳、解説付きで収録する。本GCOE事業の前身となった21世紀COEの最大成果の一つである『三道』新出本（吉田文庫蔵）の発見以降、新出本に基づく新たなテキストを望む声が上がっていた。発見者である著者は本書で新しい本文と解釈を提示し、その期待に応えている。最善本を底本にして校訂されたテキストと的確な注釈に加え、校訂の根拠を示した校訂付記を完備する。各段末尾に付される詳細な解説のほか、巻末解説においても世阿弥の生涯についての新見解が展開されるなど、末尾に至るまで読み応えのある内容となっている。

誰もが手に取りやすい文庫版ながらも、最新の研究成果が凝縮された珠玉の一冊である。研究者必携の書となり得よう。

（GCOE 研究員 江口文恵）



芸術文化環境研究コース：

活 動 報 告

芸術文化環境研究コースでは、ドラマトゥルク研究プロジェクトの一環として世界の第一線で活躍する芸術家を招き、創造の過程を知るための研究会を順次開催している。

■ダニエル・ジャンヌトー氏を迎えて

日時：2009年7月13日(月) 18:30～21:00

場所：早稲田キャンパス 6号館318教室(レクチャールーム)

講師：ダニエル・ジャンヌトー(演出家)

聞き手：藤井慎太郎(事業推進担当者、早稲田大学文学芸術院准教授)

通訳：芳野まい(GCOE研究員)

ストラズブル装飾芸術学校を卒業後、ストラズブル国立劇場付属学校で演劇を学んだダニエル・ジャンヌトーは、1989年にフランスを代表する演出家の一人クロード・レジと出会って後、レジ作品の舞台美術を15年間に渡って担当し、ジャン＝クロード・ガロッタ、トリシャ・ブラウンら振付家の舞台美術も手がけた。2001年にラシーヌ『イフィジェニー』で演出家としてデビュー、2005年にはサラ・ケイン作『ブラスティッド』を洗練された舞台装置と綿密な解釈による演出で上演し、フランス国内で絶賛された。2009年6月に静岡県舞台芸術センターで開催された「Shizuoka 春の芸術祭2009」で同作品を日本で初演出・上演したジャンヌトー氏を講師に迎え、これまでの作品の数々について豊富な映像を交えながらご紹介いただくとともに、自身の舞台美術家・演出家としてのキャリア形成について、静岡での日仏共同制作の経験について、また日本文化との接触が創作活動に与えた影響についてなど多方面にわたるお話をうかがった。



■ミシェル・ノワレ氏を迎えて

日時：2009年9月21日(月) 13:00～16:00

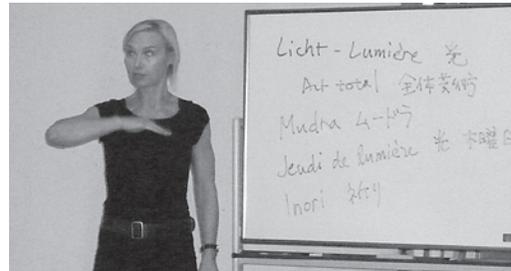
場所：早稲田大学戸山キャンパス36号館 演劇映像実習室

講師：ミシェル・ノワレ(振付家・ダンサー)

聞き手：藤井慎太郎(事業推進担当者、早稲田大学文学芸術院准教授)

通訳：芳野まい(GCOE研究員)

高度なテクニックをもとにした緻密な作品づくりに定評があるとともに、ビデオやインタラクティブ・メディアなど新テクノロジーを用いた実験的側面でも注目されるミシェル・ノワレは、ベジャールが設立したダンス学校「ムードラ」在学時にシュトックハウゼンと出会い、その作品のソリストとして13年にわたる音楽家との共同作業を積み重ねると同時に、振付家・ダンサーとしての歩みを進め、近年はレジデント・アーティストを務めるベルギー・フランス語共同体国立劇場を中心に、世界各国で活動している。2009年9月から10月にかけて開催されたダンストリエンナーレ トーキョー2009のために初来日したノワレ氏を講師に迎え、振付家としての仕事の着想や創造過程についてお話を伺うとともに、ムードラ時代から現在に至る経歴について作品映像の紹介とともに語っていただいた。シュトックハウゼン作曲『光 木曜日』の貴重な上演記録映像、ティエリー・クノフ監督のビデオ・ダンス作品『a Mains Nues(裸の手で)』、さらに最近の作品の記録映像などが、いずれも日本で初めて上映された。(研究助手 長嶋由紀子)



『淡島千景 女優というプリズム』

(坂尻昌平・志村三代子・御園生涼子・鷲谷花共編著 青弓社 2009年4月発行)

本書は、戦後の宝塚で娘役トップスターとして活躍し、1950年に映画界へ移籍後も、小津安二郎、成瀬巳喜男、木下恵介、マキノ雅弘、川島雄三といった巨匠・名匠のもとで多彩な作品に主演し、現在も舞台を中心に第一線で活躍を続ける女優・淡島千景に対して行われたインタビュー集である。淡島千景インタビューの他、淡島千景にかかわった人々(長年淡島を「姉」と慕う女優の淡路恵子と、親子二代にわたって淡島千景のマネージャーを務めた垣内健二)へのインタビューと、スクリーン上の「夫」であった森繁久彌の書簡を所収し、さらに宝塚、獅子文六、渋谷実、時代劇、小津安二郎、昭和経済史といった観点から淡島千景を論じたエッセイを収録することで、女優・淡島千景の多面性を検証した。これまで淡島千景を本格的に取り上げた書籍はなく、本書が淡島千景を詳細に論じた最初の研究書である。

(GCOE研究員 志村三代子)



◆国際シンポジウム 演劇・舞踊・芸術環境日仏交流の20世紀

グローバルCOEは、3日間にわたる研究発表と討議を通じ、日仏間の芸術交流の一世紀を多面的に検証するシンポジウムを、早稲田大学と提携関係にあるフランスの研究教育機関と共同してパリで実施する。

日時：2009年11月25日(水)～27日(金) 会場：世界文化会館、パリ日本文化会館、フランス国立図書館

主催：早稲田大学演劇博物館グローバルCOE・パリ日本文化会館・パリ第10大学演劇映画学科・フランス国立科学研究所(CNRS)

2009年11月25日(世界文化会館)

10:30～11:00 開会の辞

竹本幹夫(早稲田大学GCOE拠点リーダー 演劇博物館)

クリスティアン・ピエ(パリ第10大学)

11:00～12:00 「日仏交流の歴史と現在」

ジョルジュ・パニユ(パリ第3大学)

渡邊守章(演出家、京都造形芸術大学)

14:00～16:00 「伝統と革新 20世紀初頭のヨーロッパにおける相互関係」

モデレーター：ベアトリス・ピコン＝ヴァラン(CNRS、GCOE客員教授)

ニコラ・サヴァレーゼ(ローマ第2大学)

ベアトリス・ピコン＝ヴァラン(CNRS)

ジャン＝ジャック・チューデイン(前パリ第7大学)

カトリーヌ・エニオン(フランス国立図書館)

林正和(パリ第3大学博士課程)

16:15～17:30 「巨匠たちの出会いと対話」

モデレーター：スタンカ・ショルツ＝チョンカ(トリアー大学)

竹本幹夫(早稲田大学)

記録映像『演劇作業の根拠』(ジャン＝ルイ・パロー、観世寿夫)

出演、約20分、著作権：日仏演劇協会)上映

奥香織(早稲田大学博士課程、GCOE研究員)

18:00～ パフォーマンス(アルノー・ムニエ演出)

終演後、アルノー・ムニエ、シモン・シェママ(高等師範学校、

パリ第3大学博士課程、GCOE研究員)、マリオン・ブーディエ(リ

ヨン国立高等師範学校博士課程)を交えたトークを開催

2009年11月26日(パリ日本文化会館小ホール)

10:30～12:00 研究発表 「現代演劇と翻訳」

モデレーター：藤井慎太郎(早稲田大学、GCOE事業推進担当者)

パトリック・ドゥ・ヴォス(東京大学)

スタンカ・ショルツ＝チョンカ(トリアー大学)

秋山伸子(青山学院大学)

14:00～16:00 研究発表「舞踏と現代ダンス」

モデレーター：パトリック・ドゥ・ヴォス(東京大学)

サラ・ヤンセン(ニューヨーク大学博士課程、GCOE研究員)

カティア・チェントンツェ(トリアー大学博士課程、GCOE研究員)

シルヴィア・ヌ・パジェス(パリ第8大学ATER)

オデット・アスラン(元CNRS研究員)

16:15～18:15 ラウンドテーブル 現場からの証言

モデレーター：クリストフ・トリオー

ダニエル・ジャントー(演出家)

ロラン・ギュットマン(演出家)

フランソワ・セルヴァンテス(演出家)

ブリュノ・メサ(演出家)

フランク・ミケレットイ(振付家)

ドミニク・デュピュイ(振付家)

イザベル・ロネ(パリ第8大学)

ジャン＝フランソワ・デュシーニュ(ピカルディ大学)

18:30～ レセプション

2009年11月27日(国立図書館)

10:00～10:30 「ジューヴェからムヌーシュキンまで フランス国立図書館舞台芸術部 所蔵コレクションにおける日本の影」(スライドショー)

ジョエル・ユトウォール(フランス国立図書館舞台芸術部長)

ジョエル・ガルシア(フランス国立図書館)

10:30～12:00 研究発表「芸術交流を支える制度と環境」

モデレーター：エマニュエル・ヴァロン

ジャン＝マリ・ブイスー(パリ政治学院主任研究員)

小林真理(東京大学、GCOE客員講師)

長嶋由紀子(GCOE研究助手)

ブリジット・プルーセル(ボルドー市文化部長)

アルワド・エスペール(世界文化会館館長)

エマニュエル・ヴァロン(パリ第10大学)

14:00～15:30 研究発表「現代舞台芸術におけるコラボレーション」

モデレーター：クリストフ・トリオー

クリストフ・トリオー(パリ第3大学)

藤井慎太郎(早稲田大学)

芳野まい(東京大学博士課程、GCOE研究員)

16:00～17:30 ラウンドテーブル「日仏共同プロジェクトのこれから」

モデレーター：ベルナール・フェーヴル・ダルシエ

松井憲太郎(GCOE客員講師)

フレデリック・フィスバック(パリ市立104センター芸術監督、演出家)

アルノー・ムニエ(演出家)

17:30 閉会の辞 ベアトリス・ピコン＝ヴァラン

編集後記

ニューズレター第6号をお届けいたします。イベントカレンダーにありますように、今月末にはGCOE今年最大のイベントであります国際シンポジウムがフランスにて開催されます。また今月上旬には映像コースでも国際研究集会が開催されました。これらにつきましては次号にて紹介いたします。ご期待ください。(研究助手 崔柄珠)

News Letter 第6号

2009年11月15日

編集：崔柄珠 埋忠美沙 菊地浩平 後藤大輔 鈴木辰一 長嶋由紀子 村瀬民子 森平崇文

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03-5286-8110

URL：http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html